

「日々主とともに一受肉の神秘を生きる」

2021.6 補足資料

Ⅰ ロゴス賛歌(福音書以前に初代教会で歌われていた受肉の神秘の賛美歌)を生きる

「賛歌 一 神であるみ言葉

初めにみ言葉があった。
み言葉は神とともにあった。
み言葉は神であった。
み言葉は初めに神とともにあった。
すべてのものは、み言葉によってできた。
できたもので、み言葉によらずにできたものは、
何一つなかった。
み言葉のうちに命があった。
この命は人間の光であった。
光は闇の中で輝いている。
闇は光に打ち勝たなかった。

賛歌 二 人間となったみ言葉

み言葉はこの世にあった。
この世はみ言葉によってできたが、
この世はみ言葉を認めなかった。
み言葉は自分の民の所に来たが、
民は受け入れなかった。
しかし、み言葉を受け入れた者、
その名を信じる者には、
神の子となる資格を与えた。
彼らは、血によってではなく、
人間の意志によってでもなく、
男の意志によってでもなく、

神によって生まれた。

み言葉は人間となり、

われわれの間に住むようになった。(「人間」は、直訳では「肉」、もともとは死すべき人間をさす。)

われわれはこの方の栄光を見た。

父のもとから来た独り子としての栄光である。

独り子は恵みと真理に満ちていた。

賛歌 三 恵みと真理をもたらしたみ言葉

われわれはみな、

この方の満ち満ちた豊かさの中から、

恵みの上にさらに恵みを受けた。

律法はモーセを通して与えられたが、

恵みと真理とは、

イエス・キリストを通してもたらされた。

神を見た者は、いまだかつて一人もない。

父のふところにいる独り子である神

この方が、神を啓示されたのである。」

Ⅱ キリストにおける新しい生活(ローマの人々への手紙)

「さて、兄弟のみなさん、神の憐れみによって、わたしはあなた方に勧めます。あなた方の体を、神に喜ばれる聖なる生ける犠^{いけにえ}牲としてささげなさい。これこそ、あなた方にふさわしい礼拝である。自分をこの代に同化させてはなりません、むしろ、心を新たにして生まれ変わり、何が神のみ旨^{むね}か、すなわち、何が善であり、神に喜ばれ、また完全な^{わさま}ことであるかを弁^わえるようになりなさい。」(新約聖書:原文校訂による口語訳、フランシスコ会聖書研究所訳注)